

国際交流組織 ATBAT の結成と変容

ATBAT(建造者アトリエ)の国際・地域交流活動の歴史的経緯に関する研究 その1

FORMATION AND CHANGE OF AN INTERNATIONAL EXCHANGE ORGANIZATION ATBAT

A study on the history of international and regional exchange activity of ATBAT (Atelier des Bâisseurs), Part 1

松原 康介*

Kosuke MATSUBARA

Assuming the ATBAT (*Atelier des Bâisseurs*) is an international exchange organization, this research will clarify how its key members Gérald Hanning, Vladimir Bodiansky and George Candilis joined it, what they learned about the related area through cooperation both within and outside of the ATBAT, and how they finally became independent from Le Corbusier. Unknown previous experiences of the key members, who later became important architects and urban planners, are historically clarified. The result of this research will be meaningful for future studies examining the ATBAT's planning theory from the cultural and regional viewpoints.

Keywords: CIAM, Michel Ecochard, Eugène Claudius-Petit, MRU, Modulor, Unité d'habitation

シーム, ミシェル・エコシャル, ウジェーヌ・クロディウス=プティ, フランス復興・都市計画省, モデュロー, ユニテ・ダビタシオン

1. 研究の背景と目的、方法

1.1 研究の背景

マルセイユのユニテ・ダビタシオンを実現したル・コルビュジェ (1887-1965) の設計事務所として最もよく知られる ATBAT (*Atelier des Bâisseurs*; 建造者アトリエ)は、結成後まもなくル・コルビュジェの活動の場というよりは、その下に各地から集った多くの外国人あるいは海外出身の建築家・技術者らが、世界各地における活動を通じて独自の計画論を生み出し、そしてそれぞれの活動のためにそこから自立していく組織へと変化していった。

とりわけ ATBAT のメンバーの多くは、第二次大戦後の戦災復興のための住宅の大量供給と標準化の渦中において、中東・北アフリカ地域(MENA)を初めとする世界各地の文化あるいは地域的固有性をその計画論のうちに取り込もうとする姿勢を示していたのであって、画一的な住宅地開発や都市計画を標榜するものではなかった。それぞれの外国人がその出生を意識しながら、ATBAT 内外におけるメンバーらの交流と、異文化世界における学びを通じて、多様な計画論や工法を生み出そうと模索していたのである。ATBAT の計画論には、文化的・地域的固有性への具体的な対応策が内包されていたものと考えられるが、その本質には、ル・コルビュジェの下で働いていた、老若の外国人らの活動抜きには迫りえないといえよう。

ATBAT については、建築家でエコール・デ・ボザール初の女性教官となるマリオン・トゥールノン=ブランリーが、ATBAT の活動停止直後の 1965 年に当事者に近い立場^{注1)}から、その歴史を概括しており、ユニテ・ダビタシオンから 1949 年末のル・コルビュジェの離脱、モロッコ、アルジェリア、そしてカンボジアへの展開と、

その活動地域は多岐に渡ったことを示唆している³⁸⁾。内容的に、ATBAT に関する一次資料であるとともに最初の既往研究とも位置付けられるが、組織の結成と変容の経緯の詳細まで伝えているとは言い難い。以後書かれた多くのル・コルビュジェ研究においても、ATBAT という組織の位置づけやメンバーについては補足的に触れられているに過ぎず、結成年やメンバーに関する記述もまちまちで、その詳細については不明といってよい^{注2)}。トム・アヴァーマートは ATBAT の主要メンバーであったジョルジュ・キャンディリスを対象に、稠密な歴史的都市空間に特徴のあるモロッコの郊外地開発にみられる「地域文化への適応」の試みを「もう一つの近代」と位置付け考察している^{注3)}。クリステル・フラピエは、戦後フランスにおいて建築家と技術者の分業が進んでいく歴史的過程を示す事例としてユニテ・ダビタシオンを位置づけた上で、やはり主要メンバーであったウラディミール・ボディアンスキーを含む技術者らを対象に、独学と不安定な雇用の中で建築家と関わり国際コンサルタントという新たなキャリアを確立していく過程を明らかにしている^{注4)}。八束はじめは ATBAT を含むル・コルビュジェとその後継者達の活動を「地域主義」の視点から再考し、近代主義と地域主義は非対称的であること、従ってル・コルビュジェとキャンディリスとの間、あるいは CIAM と TEAM10 との間には、その近代主義運動に一般に指摘されるほど大きな懸隔はないことを指摘している⁴³⁾。いずれも、時代的背景を前提に建築・都市計画の地域的普遍性と、建築家と技術者の交流の重要性を示唆する既往研究と位置付けられるが、ATBAT における国際的な交流内容を主題的に掘り下げ、一次資料に基づき明らかにした研究は見られない。

* 筑波大学システム情報系社会工学科都市計画分野
国際総合学類国際開発学専攻 准教授・博士(学術)

Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Information and Systems
Division of Policy and Planning Sciences, University of Tsukuba, Ph.D.

1.2 研究の目的

そこで本研究では ATBAT を一つの国際交流組織と位置付け、主要メンバーが合流していく経緯と、ATBAT 内外の協働を通じた地域からの学び、そして自立・離散していくまでの組織の形成と変容を歴史的に考察することで、ATBAT の位置づけを明らかにすることを目的とする。これまで知られていなかった、後年重要な建築家・都市計画家となる主要メンバーの従前の経験が明らかになるとともに、今後、ATBAT の計画論を文化的・地域的視点から研究していくための背景、基礎情報の整理として意義があるといえる。

1.3 研究の方法

メンバーに毀誉褒貶があり入れ替わりも多かった ATBAT の全体像は複雑であるが、本研究では、ATBAT における国際交流を代表しうる主要メンバー4 名を取り上げ参加経緯を明らかにした上で、ATBAT における反目をも含めた交流内容、及びそれに伴う組織的変容を、当事者間の書簡^{注4)}、業務記録、自伝、計画図書、雑誌記事等の一次資料の精査と、既往研究の補足的参照から明らかにする。本研究における ATBAT の国際交流とは、組織の多様性を育んだ海外経験や国際機関での活動、地域の文化に関する調査研究や現場における地域住民との交流、内外における分野横断型の人材交流と協力・反目と定義し、論述の着眼点とする。一方で、本研究では計画内容には踏み込まず、もっぱら人物の足跡の事実確認とその経緯の解明に考察を限定する。これにより、計画論研究が主であった既往研究では体系的に扱われなかった ATBAT の歴史を明らかにする。

主要メンバーとして、出身地と世代、後年の活動地域から検討し、上述のボディアンスキー(1884-1966; ロシア; 創設メンバー)とキャンディリス(1913-1995; ギリシャ)に加え、ジェラル・アニング(1919-1980; 仏領マダガスカル; 創設メンバー)、番匠谷堯二(1930-1998; 日本)の 4 名を選定し分析対象とする。ボディアンスキーは技術者とされるが、ATBAT の共同創設者にして運営責任者でもあり、CIAM や国連、CSTB (Centre Scientifique et Technique du Bâtiment: 建設科学技術センター) といった国際機関との連携を担った人物である。キャンディリスは作家志向であり、ユニテ・ダビタシオン、モロッコでの活動を経て戦後の住宅供給事業で頭角を現し、TEAM10 を立ち上げて CIAM を結果的に解散に追い込むなどの活動と、雑誌媒体において多くの作品論を発表することで思潮をリードした人物である。アニングは、ル・コルビュジェ事務所の若手の一人としてモデュロールの発明に寄与し、事務所の番頭 (Chef d'Atelier) まで任された後、アフリカ等フランス語圏の戦災復興事業で業務を多くこなした都市計画家である。最も若年の番匠谷堯二は、清家清の高弟的存在からフランス政府給費研修員として ATBAT に所属し、上記 3 名の指導を受けながら共同研究に参加した後、アニングについてアルジェに渡り、その後も中東・北アフリカ地域で都市計画をリードした日本人である²⁷⁾。4 名いずれも、ル・コルビュジェの巨大な存在の下に参集し、ATBAT を舞台に協働しながらそれぞれの道を模索していた。

また、組織としての ATBAT は、1945 年末頃の結成からパトロンだったルフェヴルの死に伴う 1965 年の活動停止までの 18 年間に渡って存在し、上記 4 名を含む歴代 67 名の建築家、技術者、都市計画家等が在籍したとされる³⁸⁾。本研究は、良く知られているアメリカ調査旅行から結成に至る経緯の再検討から、ル・コルビュジェが

離脱し、ボディアンスキーを中心にキャンディリスら次世代育成の場となった ATBAT アフリカ及びフランスが形成され、更に彼らが各地で活動を開始していく 1954 年までを中心に考察対象とする。

本研究は 2 連の論文から構成する。本稿 (その 1) においては、主要メンバー中 3 名それぞれの ATBAT への参加経緯 (2 章) と、ル・コルビュジェを中心とする ATBAT の結成 (3 章) とマルセイユのユニテ・ダビタシオンを巡る主要メンバーの経験 (4 章)、及び人的再編成による ATBAT の変容 (5 章) を踏まえて、初期 ATBAT の特徴とメンバーの交流内容を明らかにする。次稿 (その 2) では、ボディアンスキーを所長とする新生 ATBAT を対象とし、番匠谷を含む主要メンバーがアフリカでの経験を踏まえ、CIAM 第 9 回大会で「住宅憲章」及び「最大多数のための住まい」を掲げ、本国やアルジェリアでの活動に向けて離散していくまでを対象とする。

2. 主要メンバー3 名の ATBAT 参加までの経緯

2.1 ウラディミール・ボディアンスキー (1884-1966)

最年長者のボディアンスキーに関する主観的な研究は多くないが、その経歴は履歴書 (FLC: E1-8-69) を初め、若干の自伝³⁾及び評伝³⁸⁾、²³⁾、人物研究¹²⁾から断片的に辿ることができる。

ボディアンスキーは 1884 年に帝政ロシア統治下のヘルソン (現ウクライナ) に生まれた。1914 年にモスクワ国立土木学校高速道路学部を卒業した後、高速道路技師としてロシアの保護領であった中央アジアのブハラ・ハン国 (現ウズベキスタン) に赴任し、ブハラとカーブル (アフガニスタン) を結ぶ道路建設に携わった。第一次大戦でフランスの捕虜となった後、パリの国立航空学校を卒業し、ベルギー領コンゴの鉄道会社でアルベールヴィル (現カレミ) の都市基本計画を策定した。その後ルノー研究所におけるエンジンの設計業務等を経て、航空機製造会社「ボディアンスキー飛行機」を興し、31 年までに数種の飛行機を開発した。しかし経営が軌道に乗ることはなかった。

以後は、土木と航空を柱とする多様な職務経験を活かしながら、施工管理分野の独立コンサルタントとしての道を模索する。1931 年、プレファブリケーション建築を推進していたウジェーヌ・モパン事務所の主任技術者となり、そこで出会った年少の建築家マルセル・ロッズ (Marcel Lods; 1891-1978) とウジェーヌ・ボードゥアン (1898-1983) と共に多くのプロジェクトに取り組んだ。ロッズとボードゥアンは共にボザールの出身であったが、モパンの仕事を通じて近代建築に開眼しつつあった。ボディアンスキー自身の評価では、1200 戸を擁するパリ郊外ドランシーの大規模団地「ラ・ミュエット」 (La Muette: 1934) からは、「チームワークの精神を学んだ」とし、パリ郊外バニューの「野鳥の田園」 (Champs des Oiseaux: 1935) は、「疑いなく、プレファブリケーションと産業化が統合された最初の近代的な建築・技術の実現であった」としている³⁾。さらにイギリスのリーズにおける 950 戸の集合住宅「石切の丘」 (Quarry Hill: 1937)、ジャン・プルーヴェの参画でも知られるパリ郊外クリシーの劇場「人民の家」 (Maison du Peuple: 1939) に参画し、後者では特に可動部分の計画を担当した⁴¹⁾。ボディアンスキーは、ATBAT メンバーにとって重要な協力者となる建築家ロッズと、既に戦前から多くの協働実績があった。1938 年にパリに拠点を移した際には「コンサルタント技術者」の肩書きを名乗った。

このようにボディアンスキーは、既に海外業務の経験豊かなベテラン技術者であった。彼の言う技術とは、当時最新のプレファブリケーションや鉄筋コンクリートを用いた構造技術と、チームワークとスケジューリングに基づく施工管理技術を意味したといえよう。

2.2 ジョルジュ・キャンディリス(1913-95)

キャンディリスについてはトゥールーズ・ミライユの都市計画(1960年代)が広く知られているが、その計画論は、移民を出自とする自らの貧困に動機づけられ、モロッコでの実践を初めとするATBAT時代に培われたものであることが、自伝⁹⁾及びアヴァーマートの研究で示されている。帝政ロシア統治下のバクー(現アゼルバイジャン共和国の首都)でギリシア人移民の家庭に生まれたキャンディリスは、アテネのエコール・ポリテクニック(理工科学校)で建築を学んだ。自伝によれば、師事したピキオニス教授に導かれアイギナ島の丘の上にある貧しい農民が自作した家を見学し、その無駄のない機能と美しさを備えていることに感動したことが、キャンディリスの「建築」の原点であったとされている。すなわち住民が自ら完成させる住宅という後年のキャンディリスのアイディアの原点と位置づけることができる。

在学中の1933年には、CIAMの第四回会議でアテネ憲章が採択されているが、当時20歳であったキャンディリスは会議の場でル・コルビュジエの講演を直接聞いている。以後、教員・学生とともにCIAMのギリシア支部を発足させ精力的に活動したが、1941年よりギリシアがドイツ・イタリアに占領されるとレジスタンス運動に身を投じ、地下活動として避難住民の仮設住宅建設に携わった。44年にはASCORAL(L'Assemblée de constructeurs pour une rénovation architecturale「建築刷新のための建設者会議」)のメンバーに数えられていた。戦後、西側寄りと位置づけられたキャンディリスはフランス政府給費留学生に採用され、32歳となる45年12月に渡仏した⁵⁾。これは王党派による態の良い国外追放でもあった。

パリではMRU(Ministère de la Reconstruction et de l'Urbanisme: フランス復興・都市計画省)のプロジェクトに関する情報収集をしながら研修先を探し、最後にセーヴル通り35番地のル・コルビュジエ事務所を訪問した。ル・コルビュジエとの面談では、レジスタンス中に設計していた住宅を評価され、無給ながら「マルセイユのユニテ・ダビタシオン」に参加するよう提案され、最初のスケッチ集を渡された。これまで読んできた『輝く都市(Cité Radieuse)』や『人間の家(La maison des hommes)』の図面を見て、人生最大のチャンス(La plus grand chance de ma vie)と受け止めたキャンディリスは、直ちに図面解説に取り掛かり、奨学金の切れた後もベビーシッターや建物塗装、観光ガイド、演劇等のアルバイトをし、戦時配給食の残りを食べながら仕事を続けた⁵⁾。

ほどなくATBATが結成されたが、当初はル・コルビュジエの事務所にATBATの事務所が置かれており(後述)、ユニテ・ダビタシオンに参加していたキャンディリスはそのままATBATのメンバーに数えられることになる。このようにキャンディリスは、学生時代からCIAMの賛同者となり、ル・コルビュジエの事務所に粘り強く留まり、ユニテ・ダビタシオンという最前線を担うこととなった。

2.3 ジェラル・アニング(1919-80)

モデュロールの発案に貢献したことで知られるアニングもまた、業績の全体像が知られていない都市計画家である。ここでは本人に

よる履歴書¹⁴⁾、アニングの晩年の所属先であったIAURIF(イル・ド・フランス地域整備・都市計画研究所)がその死に際してまとめた評伝¹⁷⁾と人物研究¹⁵⁾、及び関連研究から概括する。評伝は、「La carrière internationale d'un grand urbaniste(偉大な都市計画家の国際的キャリア)」と題されている。

アニングは1919年、フランスの植民地(1896-1960)であったマダガスカル首都タナナリヴ(英名アンタナナリボ)に生まれた。2歳の時に父親を交通事故で失っている。タナナリヴでは、1892年に建築家アンドレ・ジュリイによりいわゆるフランス大通り(Avenue de France)が実現され、フランス・ルネサンス様式の植民都市計画が、初代総督ジョゼフ・ガリエニとその補佐官ユベール・リヨテの政策の下で展開されていた¹⁶⁾。このリヨテは、その後1912年から24年までモロッコの初代総督となり、都市計画家アンリ・プロストを抜擢し、歴史都市である旧市街と、植民都市である新市街の分離政策をとることで保全と近代化を両立しようとした統治者である²⁴⁾、²⁸⁾。この政策はリヨテ方式と呼ばれ仏領各地で広く参照されていたが、タナナリヴにおいては、1918年に創設された都市計画局において、都市計画家ジョルジュ・カッサーニュがリヨテの分離政策を踏襲した計画を策定していた¹⁶⁾。少年アニングは、1932年頃に家族と共にパリに移るまでの13年間、タナナリヴに住み、その都市空間を実生活の場として経験していた。

1937年にパリのエコール・デ・ボザールに入学したが、同時にル・コルビュジエ事務所に入所してドラフトマンとなった。仕事に忠実に取り組み、結果としてエコールのディプロム(修了証)は得ることは出来なかったものの、軍籍を経て戦後の45年までに事務所の番頭(chef d'atelier)となっていた¹⁴⁾。1940年にパリがドイツ軍に占領されると、43年にヴィシー政権側のサヴォワに疎開し、そこでル・コルビュジエの計画論の基礎単位であるモデュロールの研究を開始し、成果を書簡によって報告するようになる。

1950年にASCORALの研究成果として出版され反響を呼んだル・コルビュジエ『モデュロール』においては、アニングとル・コルビュジエの間で当時戦わされた議論の顛末が記されている²²⁾、²⁷⁾。出発前に疎開中の「宿題」を求めてきた24歳のアニングに対し、ル・コルビュジエは全ての建設現場で用いられる物差し、原基となるような「比例格子」の構想を語った。更に、「手をあげた人間の高さ2m20をとってみよ。それを1m10の正方形を二つ重ねた中に入れてみよ」という指示をアニングに与えた。ところが、黄金比を巡る数学的思考法に齟齬が生じてしまい、アニングの見解は間違いであったと同書で書かれることになる²⁸⁾。また、遅れて研究に参加したアンドレ・ヴォジャンスキー(André Wogenscky; 1916-2004)の回想によれば、アニングはル・コルビュジエの構想が正確にわからなくなり解釈を誤ったとされている⁴²⁾。ヴォジャンスキーは続いて自身もル・コルビュジエと論争しなければならなかったと述べているから、壮大な構想を自由に語るル・コルビュジエと、それを形にしなければならぬ若手所員との間で熱心な討議が続けられる中での出来事として、想像に難くはない。そうした中、アニングは1945年に番頭の座を降り、ヴォジャンスキーがこれに代わっている。

実際、「手をあげた人間」をアニングがクレヨン(鉛筆)でスケッチしたものが複数残っている(Fig.1)(FLC:B3-17-29)。ル・コルビュジエは「非常に魅力的であり受け入れるが、詳細に深入りしず

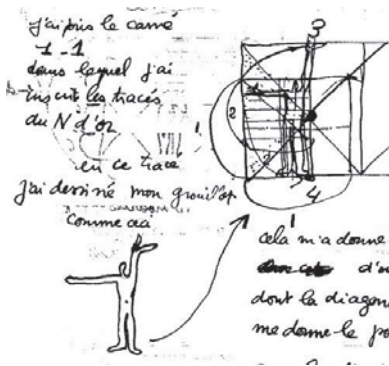


Fig.1 Letter (part) reporting Hanning's research on Modulor.

このようにアニングは、生まれ故郷であるマダガスカル・タナナリヴのフランス植民都市計画に基づく空間を体験してから、ル・コルビュジェの建築にふれ、モデュロールの発案プロセスにも貢献した、まさに教え子ともいふべき存在であった。

3. ル・コルビュジェを中心とする ATBAT の結成

3.1 クロウディウス＝プティの ASCORAL 加入とフランス戦災復興

戦前まで気鋭の作品と言論活動において脚光を浴びながらも戦中は実作の機会に恵まれていなかったル・コルビュジェ¹⁰⁾は、第二次大戦後になって MRU を初めとする政府機関の委員を務めるなど、フランスの戦災復興を主導する理論家の一人と目されるようになっていた。フランスは戦勝国ではあるが、ドイツ占領下 (1940-45) にあった多くの都市が連合軍に爆撃されており被害は甚大であった。1943 年には、アニング、ヴォジャンスキーらの若手、それにロッズらとともに、モデュロールの研究のため ASCORAL¹¹⁾ を立ち上げたが、ここにはレジスタンス運動の闘士だった政治活動家で、後に MRU の大臣となるウジェーヌ・クロウディウス＝プティ (Eugène Claudius-Petit:1907-1989) も参加することになる。

1943 年 5 月、レジスタンス諸派をシャルル・ド＝ゴール率いる自由フランス支持にまとめあげようとしていたジャン・ムーランにより全国抵抗評議会 (CNR) が設立されると、レジスタンス統一運動 (MUR) の代表としてこれに合流したのがクロウディウス＝プティである。ブノワ・ブヴローによれば、北アフリカ戦線を経て自由フランスの本部となっていたアルジェを訪れたクロウディウス＝プティは、原住民たるアルジェリア人の多くが粗末なバラックに住んでおり、またドイツや連合軍の破壊・爆撃によって市街地に大きな被害が出ていることから戦災復興都市計画の必要性を痛感するに至る。44 年にはアルジェ県の都市計画審議会委員となり、そこで戦前にル・コルビュジェが情熱的に提案していたアルジェ計画 (プラン・オビュ)²⁾、⁴³⁾について知悉し、またその協力者であったアンドレ・シーヴ (André Sive:1899-1958)、ピエール＝アンドレ・エムリー (Pierre-André Emery:1903-1982) といったフランス人建築家¹²⁾、またオーギュスト・ペレの下で働く都市計画技師で、レジスタンス活動後に MRU の技官となっていたピエール・ダロズ (Pierre Dalloz) といった人物らと面識を得た³³⁾。シーヴとエムリーは既にル・コルビュジェとともに戦前にアメリカを訪問しており状況をクロウディウス＝プティに伝えた。こうして建築・都市計画に開眼したクロウディウス＝プティは、復興のために近代建築家や技術者らを結びつ

けるための器が必要であると認識する。1944 年から始まったド・ゴール臨時政府下で下院議員として国政に携わるようになると、11 月には自ら ASCORAL の一員となってラ・ロシェル・パリス (La Rochelle-Pallice) やサン・ディエ・デ・ヴォージュ (Saint-Dié-des-Vosges) といった地方都市の戦災復興計画を支援した。A.A.誌で戦災復興をテーマとする論文⁸⁾を自らも発表した、ついには MRU の大臣 (48 年・53 年) となり、政治家として、近代建築による戦災復興を推進することとなる。

3.2 アメリカ調査旅行における調査活動

1945 年 9 月、外務省文化部及び外交部の共同企画として、ル・コルビュジェを団長とするアメリカ旅行が実施された。ル・コルビュジェとクロウディウス＝プティが中心となって選定したメンバーは、ボディアンスキーを筆頭に、アニング、シーヴ、エムリー、クロウディウス＝プティ自身、そして MRU の地域空間整備課長 (Chef du Service d'Aménagement du Territoire) であったミシェル・エコシャール (Michel Ecochard:1905-85) であった。調査の目的は、戦前の状況を知るメンバーを含む多様な人材とともにアメリカの発展に学び、フランスの戦後復興のあり方を多角的に展望することにあった。この調査旅行は、ニューヨークの建築・都市計画調査、またテネシー川流域開発公社を訪問しての地域開発調査等、7 か月をかけアメリカ全土を横断するという広域旅行だったことが知られているが³³⁾、個々人の具体的な活動内容には違いもみられ、それぞれの報告書と書簡から詳細を知ることができる。

ル・コルビュジェとクロウディウス＝プティの出発は年末まで遅れたため、当初はこの時 61 歳のボディアンスキーが団長的存在となった。フラビエによれば、技術者としてのボディアンスキーがアメリカにおいて最も関心をもったのは、プレファブリケーションの工場とその研究所であり、ATBAT をそのフランス版として位置付けていた¹²⁾。一方、副団長として国連関係者とのロビー活動 (後述) やチームのロジ業務もこなし、フランスに残っていたル・コルビュジェとはアメリカから書簡で頻繁に連絡をとっている。その書簡では人選案を含む ATBAT のあり方が協議されており、両者で ATBAT の構想をリードしていたことがわかる (FLC:D1-13-31)。すなわちボディアンスキーの活動は、技術者としての活動だけでなくむしろ ATBAT の組織運営に集約される。

一方、アニングの報告書はだいぶ遅れて 47 年 3 月に提出された。アメリカの新しい文明は住むこと、働くこと、憩うこと、移動することの 4 つの機能に集約されており、エスプリ・ヌーボーの理念とも合致する、等と簡潔に述べられている (FLC:D1-11-69)。また、報告書に添付されたル・コルビュジェ宛の手紙では、「貴方が『伽藍が白かったとき』²⁰⁾で示したアメリカ観と私の印象は異なるかもしれない」と述べている。同書はアメリカの機械文明を批判的な身振りで肯定するものであることを踏まえると、アメリカ旅行はアニングの強い関心を惹かなかつたようにも考えられる。

しかし、これには事情があったことがメンバー間の書簡からわかる。旅行が始まってほどなく、アニングはモデュロールを巡るル・コルビュジェとの確執が原因で「気が滅入る状態 (broyer du noir)」に陥ってしまい、途中で帰国したいと訴えるようになっていた。見かねたボディアンスキーがル・コルビュジェへの書簡中で、旅行で興味深いものを多く見ることで回復してもらいたいと書いている

(FLC:D1-13-27)。ル・コルビュジェはボディアンスキーに謝意を示すとともに(FLC:D1-13-31)、アニングに対し、アニングの ATBAT 加入を皆が喜んでいること、仕事にのめり込んでディプロムのとれなかったアニングのためにメンバーに抜擢したこと、アニングには良い建築家になるだけの才能がありながら、それをふいにしてしまうだけの欠点も持ち合わせているから注意して、他の ATBAT のメンバーとも議論しなさいといった意味の書簡を送っている(FLC:D1-13-66)。他のメンバーはアニングにとってみれば建築のみならずいわば人生の先達ばかりだったろうし、ル・コルビュジェとしてもここではいわば親心によりアニングを激励したものであろう。

結果としては、その後数年に渡って、両者の間でモデュロールの発案者 (paternité) を巡る確執があったことがエレン・グラント＝ロスらにより指摘されている^{注13)}。しかし、最年少ながらル・コルビュジェ事務所の番頭として大変な苦勞をし、アメリカにもさして関心を持たずにいたアニングを、メンバーでサポートしたことは、後の ATBAT の再編成に繋がっていくことになる。

3.3 ミシェル・エコシャールの調査活動

ここで、後年 ATBAT の重要な協力者となるエコシャールの活動も取り上げる。シリア・レバノンで都市計画と考古学を合わせたディシプリンを形成し、実際海外業務に忙殺されていたエコシャールが、そもそもどうした経緯でアメリカ調査に参加したのだろうか。

エコシャールはボザール出身の建築家であったが、戦前の 1931 年から 44 年にかけて、フランス委任統治領であったシリアとレバノンにおいて活動していた。当時、シリア・レバノンの植民都市計画は、アルジェの都市基本計画の担当者でもあるルネ・ダンジェ (René Danger;1872-1954) が主導しており、エコシャールはその下で策定業務に携わっていた³¹⁾。同時に、当地の豊かな歴史遺産の魅力に強く魅かれ、同年輩のフランス人考古学者ジャン・ソヴァジェ (Jean Sauvaget;1901-1950) とともに数多くの歴史的遺産の調査^{注14)}を行い、その保全修復に尽力していた。シリア・レバノンがヴィシー政権を脱して連合軍に加わるきっかけとなった 1942 年夏のド＝ゴール将軍の遊説に際しては、プロパガンダ的な報告書『ド＝ゴール遊説録』のイラストを担当し、山岳地帯の集落やヘレニズム時代の柱廊、オスマン様式のモスクといった、歴史的遺産のイラストを各章の扉として掲載している¹¹⁾。

1944 年にシャルル・ド＝ゴール臨時政府が発足すると、エコシャールはシリアの都市計画局から MRU に移籍し地域空間整備課長となった。調査旅行出発直前の 45 年 9 月には、同じ肩書きによりル・コルビュジェに対し、MRU の公募事業に関わるヒアリングのため MRU の自分の事務所に来訪を依頼している(FLC:D1-9-183)。

エコシャールは 11 月にニューヨークから調査を開始した。3 月 1 日にパリに帰還した後、3 月 7 日にフランス建築家連盟とフランス技師・技術者連盟合同主催による「アメリカの都市計画」と題した講演^{注15)}を行い、その翌日にバイルートに業務のため帰還している。ル・コルビュジェに向けて報告書とその講演の梗概をバイルートから送付したのは 7 月のことで、ニューヨークのフランス大使館の文化参事官だった人類学者のレヴィ＝ストロースにも同報されている。そして同年中には保護領モロッコに都市計画局長として赴任することになるのである。こうした経緯から、中東の復興に通じた都市計画家で自由フランスでも活動していたエコシャールが、クロウディ

ウス＝ブティヤル・コルビュジェの目に留まったものであろう^{注16)}。

報告書は訪問した場所について旅程順に書かれているが、エコシャールが得意とする建物や都市、地域のデッサンあるいはダイアグラムが多用されている(FLC:D1-13-229)。例えばプエブロでは、インディアン集落の構造や、17 世紀にスペイン人宣教師に建設され現地職人によって装飾がなされてきた教会について報告を行っており (Fig.2)、他の調査団メンバーとは異なる歴史的視点、都市形態学的視点がみられる。一方で、グランド・キャニオンでは、一次道路、二次道路に分けられ袋小路型駐車場を用いた周辺道路計画にも着目し、自然保全のための計画として評価している (Fig.3)。これは後年のシリアにおける都市計画手法を彷彿とさせるものがある。

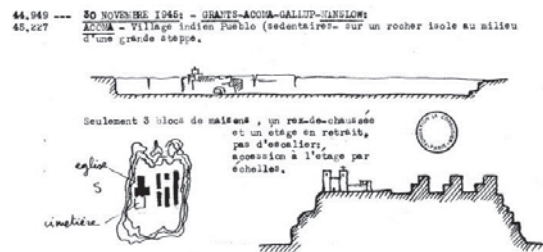


Fig.2 A part of the report about the Indian's village of Pueblo

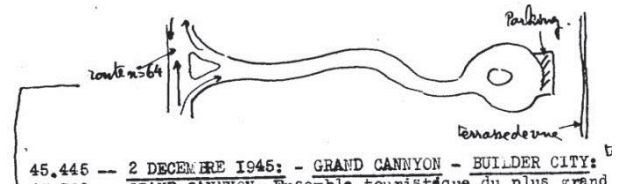


Fig.3 A figure about the road plan around the Grand Canyon

また講演梗概を見ると、冒頭に主催者による紹介があり、戦時下のシリアでやむをえず旧市街に道路を建設せざるをえないというエコシャールの苦衷に共感が表明されている。エコシャールは後にシリアでオスマニザシオン (開削型道路計画) の手法を巡り UNESCO から批判を受けることになるが、オスマニザシオンは例えばアレppoにおいてはダンジェによる 1931 年計画で既に採用されていたことが明らかとなっている²⁵⁾。エコシャールは結果的にはオスマニザシオンを継承したために批判されることになるが、1946 年の時点ではオスマニザシオンに懐疑的だったのである。

全体として、エコシャールの報告は詳細かつ明快で、アメリカの新しさだけでなく古いものも扱うことで内容的に厚みのあるものとなっている。その広い見識が後の ATBAT の支援に繋がるのである。

3.4 国連本部ビルのロビー活動

旅行中、ワシントン、ニューヨーク滞在では、外務省企画としての一環で、国際連合との関係も強化された。フランスは当初アメリカへの国連本部設置に反対の立場であり、フランス誘致が成功した場合の計画の顔としてル・コルビュジェをアピールしようという思惑があった。結果的には、アメリカのウォレス・ハリソンを委員長とする国連本部ビル (1952 年竣工) の設計委員会が発足したが、その際にはフランス代表としてル・コルビュジェが任命され、ボディアンスキーも委員会のコンサルタントとして参加していた。キャンディリスによれば、国連におけるロビー活動の経験があったボディアンスキーが、ル・コルビュジェをフランス代表に担ぎ上げたものとされている⁴⁾。以後、ボディアンスキーはニューヨークに折に触れて滞在し、ハリソンやビルの敷地の提供者であるロックフェラー

家の要人と接触して交渉を重ねている。

ATBAT の結成後の 47 年 1 月には、ATBAT として国連ビルにどう関与すべきかについての見解を所内向けの報告書にまとめている (D1-19-258)。報告の趣旨そのものは、有能なハリソンを補佐し、その協力を得ることで ATBAT アメリカと呼ぶべき活動を発展させるべきであると提起する穏当なものである。しかしその理由として、ATBAT は法的根拠を持つ組織ではなく (illégal)、フランス国内の事業も決して安泰ではないためにそうするのだと説明されており、ATBAT という組織の特徴を示唆するものとして注目される。

一方、フランス本国では、1946 年 1 月、経済復興のために計画庁 (Commissariat Général du Plan) が発足されていた¹⁷⁾。初代長官は国際連盟の元事務次長であったジャン・モネであった。アメリカ旅行から帰国したボディアンスキーは、ロズと共にモネのアドバイザーに任命され、ルノー、エールフランス、フランス銀行等の基幹企業の国営化等の提言を行った。自伝によれば、ボディアンスキーがモネ・プランの枠組みで成し遂げた最大の功績は、建築の産業化を推進する機関として CSTB の創設を主導したことである¹⁸⁾。CSTB はフランス国内における新しい技術の承認と技術研究への助成を担う機関として MRU (Ministère de la Reconstruction et de l'Urbanisme ; フランス戦災復興・都市計画省 ; 1944 年 10 月発足) の下に創設されたものだが¹⁹⁾、後にボディアンスキー自身がこの研究助成を活用して ATBAT の研究事業を推進することになる。

こうしてボディアンスキーは、技術者としてだけではなく、建築全般の産業化を政策提言する、萌芽的だが最先端の、いわば技術政策コンサルタントとして独特なキャリアを形成しようとしていた。

3.5 結成時の ATBAT と二つの事務所

既往研究が指摘するように、ATBAT は、このアメリカ調査旅行のメンバーが中心となって、マルセイユのユニテ・ダビタシオンを初めとする MRU の事業を実施するために結成された組織である。創設メンバーにはル・コルビュジエ、ボディアンスキーを筆頭に、アニング、ヴォジャンスキーら子飼いの若手に加え、事業担当のマルセル・ブイ (Marcel Py)、管理経営担当のジャック＝ルイ・ルフェヴル (Jacques-Louis Lefebvre) が数えられている。

結成時期については諸説あるが²⁰⁾、ATBAT という名称は 45 年末の書簡に既に出現している。公には、ユニテ・ダビタシオンの特集号である“*L'homme et l'architecture* (人間と建築)”誌の 1946 年 9・10 号 (9 月発刊)²¹⁾に ATBAT 名義の広告が出されている。

広告ではまた、ATBAT には二つの事務所があり、管理経営部門 (Direction administrative et commerciale) がサン＝オギュスタン通り 10 番地に、そして研究所 (Bureau d'étude) 及び事業部門 (Direction des Travaux) がセーヴル通り 35 番地に存在するとされている。前者はルフェヴルの個人事務所であり、後者はル・コルビュジエの個人事務所を示す住所として知られている。ATBAT が建築・技術・事業・管理経営の 4 部門から構成されていたことはよく知られているが、このうち管理経営部門だけがサン＝オギュスタン通り 10 番地に存在し、ルフェヴルが管轄していたことになる。

ル・コルビュジエの事務所がしばしば ATBAT と同一視されるのは、自身の著書でもそう示している通り (後述)、まず住所が同一であった為であろう。しかし上述の通り、ボディアンスキーは ATBAT とは法的な位置づけのない任意団体であると認識していた²²⁾。実

際、アニングやキャンディリス等はル・コルビュジエ事務所から給与をもらう正式な所員であり、またそうした所員が ATBAT メンバーの多くを占めていた。しかし ATBAT には、ボディアンスキーのように独立したコンサルタントもいれば、パトロンとして ATBAT に資金援助する立場の資産家ルフェヴルのような人物もいた。メンバーの多様性は ATBAT の特筆すべき特徴であったが、それは組織やメンバー個々の位置づけの曖昧さと裏腹であったといえよう。

3.6 小括

国連とも連携した復興の枠組みが模索されるなかでの、ル・コルビュジエの卓越した構想力に基づく建築家・技術者・政治家の大きかりな協力の枠組みで生まれたのが ATBAT であった。その枠組みの中で、メンバー個人の経緯はこれまで明らかとされていなかったが、アルジェの復興にヒントを得たクロウディウス＝プティの政治的支援、建築の産業化を目指すボディアンスキーの技術と取りまとめる力、中東とフランス、新しいものと古いものを俯瞰するエコシヤールの広い見識が、アメリカ旅行を中心に交錯していた。付記すれば、偉大な建築家の下で苦悩する若手アニングに期待し育てようとする姿勢も垣間見られた。こうして一定の人間関係を形成した諸活動が、ATBAT の多様性を育んだといえる。一方、こうした経緯から明らかとなるのは、結成時の ATBAT とは、ル・コルビュジエより 3 歳年長のボディアンスキーや、その資金援助がなければ立ち行かなかったという資産家のルフェヴルを外部からいわば共同代表に迎え、共に MRU の戦災復興事業を請け負うために改めて結成された、雇用関係ではない有志連合的な組織だったということである。

4. マルセイユのユニテ・ダビタシオンを巡る主要メンバーの経験

マルセイユのユニテ・ダビタシオンは、1947 年初頭に建設が決定し、49 年に竣工した。ル・コルビュジエは、その実現にはチームの力、特に「若者 (des jeunes)」の力を必要としたと述べている。「われわれはすばらしいチームの助力によって建設した。どこまでも厳密でなくてはならない詳細図を、しかもアトリエで 10 回も描き直さなくてはならないような性質の仕事に取り組めるのは若者をおいて他にない。これほど大きな仕事 (10 億フラン) の現場をきちんと指揮できるのも若者だけだ」²³⁾。若者とはアニング (1947 年当時 28 歳) とキャンディリス (同 34 歳) を含む ATBAT の若手のことであろうが、後に重要な都市計画家・建築家となる二人の若手は、設計製図や現場指揮から実際に何を経験したのであろうか。また、ATBAT のベテラン技術者であったボディアンスキーは、まとめ役としてどのような経験をしたのであろうか。

4.1 アニングの経験

まずアニングについてみると、ル・コルビュジエによる MRU の事業は結果として「マルセイユのユニテ・ダビタシオン」のみが実現され後年に広く知られることとなったが、当時はパリ中心市街地、ラ・ロシェル＝パリ、サン＝ディエの戦災復興都市計画 (いずれも未実現) 等も取り組まれていた。履歴書によれば、アニングは、これらの都市計画の事前調査を主に担当する一方、マルセイユのユニテ・ダビタシオンに直接的に関わることはなかった。

しかし、ユニテ・ダビタシオンにおいてはモデュロールが初めて実作に適用されたと言われている²⁴⁾。単位を意味するユニテ、ひいては躯体 (「独立した支持体」) に対して自由に着脱可能な住戸から

なるという特徴は、上述の原基としての「比例格子」のアイディアに由来するものと考えられる。「手をあげた人間」のレリーフが正面入り口付近に象徴的に設置されている点からみても、ユニテ・ダビタシオンにおけるモデュロールの重要性は高かったといえる。上述のように萌芽期のモデュロールに携わったアニングの貢献は、その限りで認めてよいであろう^{注23)}。

また、当時においては、ル・コルビュジェ、ひいては ATBAT にとって、ラ・ロシェル＝パリス^{注24)}及びサン＝ディエの計画 (Fig.4)の方がマルセイユよりも大規模で、優先度も高いものであった^{注25)}。すなわちそれぞれの計画がユニテ・ダビタシオンを複数配置した、面的広がりのある住宅団地の計画であった。師弟間の確執があったとしても、アニングはまさにその ATBAT の重要な都市計画を任されていた若者の一人だったともいえるであろう。



Fig.4 A dessin of the plan of Saint Dié showing some Unités, with the signature of Hanning on lower-left(FLC18450)

しかし、決定目前に思われたラ・ロシェル＝パリスの計画は、ヴォジャンスキーとキャンディリスがこぞって証言しているように、1946年の市の都市計画審議会におけるル・コルビュジェ自身の失態により挫折する。たまたまイラクで古代の住宅が発見されたというニュースに触発されたル・コルビュジェが、「皆さまにメソポタミアの住宅を建設して進ぜよう」と熱弁し、その場を啞然とさせ、そのまま計画が中止となったという一件である^{注26)}。サン＝ディエの計画も予算の問題から挫折している。アニングは、師の責任に帰すべき割に合わないあおりを受けて、自身の担当業務を失ったといえる。

4.2 キャンディリスの経験

キャンディリスは、上述のエピソードから、ル・コルビュジェ事務所採用された当初から実施設計図化等の図面処理に当たっていたと考えられる。自伝によれば、奨学金が切れたキャンディリスは内密で他所でアルバイトをしていたが、それが露見すると叱責された後に、ATBATではなくル・コルビュジェの個人事務所から給金を得る形となった。これは給与・社会保障通知から裏付けできる^{注27)}。

ヴォジャンスキーやボディアンスキーとの間に交わされた多くの書簡から、早い段階でマルセイユに派遣され、材料や模型の発注、床の組み立て(FLC:G3-13-169)、エレベーター室等の電気設備計画(FLC:G3-14-325)、市や業者向けの実施図面作成(FLC:G3-14-6)、施工監督業務に携わっていたことがわかる。仕事は重労働であり、作業に当たる人員も少なかったと自伝にある⁵⁾。ヴォジャンスキーは業者に対し、現地では全てキャンディリスの指示を仰ぐよう通知しているが、ある時にはキャンディリスの負担があまりにも重くなり、ボディアンスキーも交えた話し合いによって負担を軽減したということもあった(FLC:G3-13-169)。

これらの業務に関して自伝の記述を追うと、政府が目指していた

住宅の標準化を「個別的かつ集合的」(Individuel+Collectif)住宅計画によって実現したのがユニテ・ダビタシオンであるという、ル・コルビュジェの話を踏まえて、そのための設備、例えば隣家の騒音を隔絶する壁や、各戸のバルコニーを画するブリズ・ソレイユ(日除けの壁)が画期的だったと述べている⁵⁾。個別集合住宅への関心はキャンディリスも共有しており、後に50年代以降に自身が実現した多くの住宅計画、とりわけカサブランカ、パリ郊外、パニョル・シュー・セーズ^{注28)}、トゥールーズ・ミライユに至るまでの一貫したテーマとなっている。後年、キャンディリスが番匠谷に注目するのもその脈絡においてである。

一方、現場が直面していた、いわゆるユニテ・ダビタシオンへの非難と無理解への対応もまた、ル・コルビュジェのいう「現場の指揮」に該当しよう。ここでは二つの逸話⁵⁾を取り上げる。ある時ヴァンサン・オリオール大統領夫人が現場視察^{注29)}に訪れると、建設反対派であったマルセイユ市長が夫人に向けて「マダム、市民は皆このスキャンダルを即刻中止を求めています！」と断言した。キャンディリスは猛り立ち、この住宅が弱い人々のものであること、多くの市民からここに住みたいという手紙が来ていることを力説した。夫人は「よろしい、では私自身で判断しましょう」と、キャンディリスの案内に従って視察を行い、結果、キャンディリスは夫人を深く納得させることに成功した。

また別の機会では、タクシーの運転手がマルセイユ市による中傷キャンペーン^{注29)}を鵜呑みにしているのを知ると、キャンディリスは現場を丁寧に案内した。運転手が感嘆しながらも「これは金持ちのための家だ。俺たちのためじゃない」と言う、「もちろん、皆さんのものです。この建物は全ての人のためのものなのです(C'est pour tout le monde)」と説明した。

1947年には、ル・コルビュジェ事務所の門を叩いた26歳のアメリカ人シャドラック・ウッズが参加し、キャンディリスは公私に渡りその先輩役となった。ウッズもまたATBATのメンバーとなり、更にキャンディリスの補佐役としてマルセイユにも同行するなど、次第にATBATに欠かせない若者となっていった。例えばヴォジャンスキーは現地のボディアンスキーに対し、現場での判断が必要とされる事項について、ウッズとキャンディリスに決定を伝えよと指示を出している(FLC:G3-14-358)。工事中の屋上でキャンディリス、ウッズと議論している写真が残っている (Fig.5)。

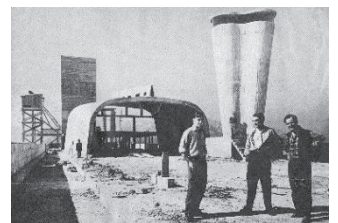


Fig.5 Woods, Bodiansky and Candilis

これらの経験から、キャンディリスは、建築家とは、現地の人々の中に入り込み、彼らと話し、理解しようとつとめ、そして納得してもらう仕事なのだと悟ったとしている。現場を通じた地域理解は、キャンディリスが最も得意とする手法となった。

4.3 ボディアンスキーの経験

ATBATの一方の長を自任していたボディアンスキーは、建設開始の時点ではパリで技術設計 (Fig.6)と業者連絡に当たっていたが、1949年3月1日、ル・コルビュジェに対し「マルセイユの現場は自分の存在が不可欠な段階に入ったので、今後は月曜から木曜まではパリにおり、金曜から日曜まではマルセイユの現場に詰めるよう

にしたい」と申し出ている(FLC:G3-13-121)。その後現場からル・コルビュジェに宛てた書簡では、「コンクリートチームの仕事は、18階まで、テラスも含めて全て完了しました。研究は非常に良く進んでおり、施工作業を通じた実施研究は更に継続され、その中で細かい問題も解決されるでしょう。成果を紛失したり問題点を忘れたりすることのないよう、全ての書類を整理して提供します。更に、今から一週間位でコンクリートのデザイナーを調達し、北側の階段の調査に入ります」という趣旨の報告をしている(FLC:G3-13-193)。まさに新技術の活用と現場管理の手腕が発揮されているといえるが、その中でも、資料の保存と提出、問題点の報告についてあえて約束している点が注目される。ここからわかるのは、ル・コルビュジェが総責任者として情報管理を徹底していたということである。これは後で自らの著作の出版に必要な資料とみなしていたからであろう。また、ボディアンスキーもそれを認識し注意を払っていた。

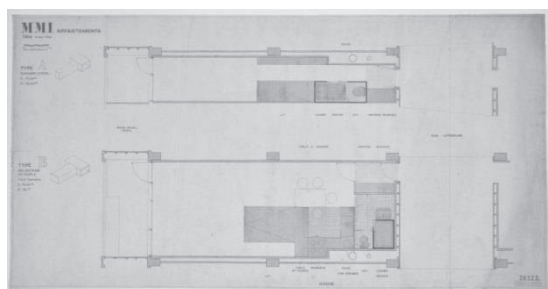


Fig.6 Plan of a room of the Unité by Bodiansky in 10th May 1946(FLC26322)

ル・コルビュジェはこの現場を「試験工事現場(chantier-laboratoire)」と呼んでいる²¹⁾。フラピエによれば、この現場の新しさは、それまで建設会社が設計から施工までを一貫して請け負っていたフランスで、技術設計を最重要かつ独立した工程に位置づけ、更に施工も切り離し、分業に基づき全体プロセスを再編した点にあった。実際、建築設計はル・コルビュジェその人が独占的に行うもので、ATBATのメンバーは実施図面と現場施工に専従していた¹³⁾。

分業化を巡る歴史的な変容を背景にして、ATBATの人間関係もまた変容していった。ボディアンスキーは2か月もすると、調査と作業の遅延、人員不足、予算不足の様々な問題が噴出していることに気付いた。キャンディリスもウッズも疲弊していた。49年5月には、「内密(confidentielle)」扱いとされたルフェヴルへの書簡において、これまでのATBATにおける協働には良い点もあるが問題点もあり、組織を見直す必要があるから、次の会議で解決のために発言しようと思うと心中を吐露している(FLC:G3-13-292)。

その会議の議事録は管見では見つからない。しかし、後述のようにATBATの指導者交代は49年8月のことであるから、それまでの3か月程の間にボディアンスキーより重要な提案がなされ、何らかの決定があったものと考えられる。その提案とはどのようなものだったのだろうか。彼の技術はユニテ・ダビタシオンの実現に不可欠であったが、現場の技術者の負担が増すにつれて建築家との関係が悪化していくという状況において、何らかの形による、ル・コルビュジェとの対等な関係の再構築を求めたのではないかと考えられる。しかし、そうしたボディアンスキーを、ル・コルビュジェは「(書物で)告発すべき」「技師の自由行動」と呼んで憚らなかった^{注30)}。

4.4 小括

1952年10月、ユニテ・ダビタシオンの落成式でクロウディウス＝プティMRU大臣よりル・コルビュジェにレジオンドヌール勲章が授与された。後にボディアンスキーは自伝において、マルセイユの現場では「困難が多くそれゆえにドラマティックであったが、全ての参加者のおかげで成功した」と書いている³⁾。これはポジティブな評価と言えようが、必ずしもマルセイユのユニテ・ダビタシオンだけを評価したのではなく、この現場で芽生えたキャンディリスとウッズらとの、次に繋がる横の連携を評価したものともいえよう。

5. 人的再編成による ATBAT の変容

1950年の『マルセイユのユニテ・ダビタシオン』では、冒頭に「ル・コルビュジェ建造者アトリエ(Atelier des Bâisseurs Le Corbusier)」と題された写真とメンバーリストが掲載されている²²⁾。竣工前後のATBATの状況を伝えるものだが、写真にはドラフトマンがずらりと並んだ室内が写っている。リストには建築家としてヴォジャンスキー、キャンディリス、ウッズ、技術者としてボディアンスキー、経営管理者としてルフェヴルが含まれており、アニングは含まれていない。ただし、「ル・コルビュジェ建造者アトリエ」と一文で表記され、更に「28年前からパリ・セーヴル通り35番地に開設されている事務所」^{注31)}と付記されている点には補足も必要である。

トゥールノン・ブランリーは65年にこう回想している。「研究と経験、創造に渴していた次世代の若者達にとり、ATBATとは、尽きることのないチーム精神により成功した実験に見えるかもしれない。どれだけ多くの若い外国人建築家・技術者達が、サン＝オギュスタン通りの事務所の門を叩きに訪れたことだろう！そしてこれからも、あの活き活きとした、時には嵐のような、けれどもいつだって実り多かった夜を思い出すことだろう！」³⁸⁾。つまりATBATの住所はだいぶ以前にル・コルビュジェの事務所からルフェヴルの事務所に移っていたということになる。本章ではアニングの名前がリストにないこと、及び事務所の移転の経緯から、組織の変容を考察する。

5.1 アニングの辞職

1947年10月10日、アニングはル・コルビュジェ事務所を辞職した。その理由をこう書いている。「審美主義や学術研究に価値はありません。実行性ある復興のためにただ働くこと、それだけが解決なのです。それは貴方には決してできないことです。それが貴方の元を去る理由です」(FLC:D2-16-119)^{注32)}。ここで言われている「審美主義や学術研究」が、ル・コルビュジェが長い時間をかけて探究し、精力的に発表してきた建築・都市計画論を指していることに疑いはない。また、「実効性のある復興のためにただ働くこと」とは、黙々と実務に取り組むということであろうが、モデュロールやラ・ロシェル＝パリスでの件を念頭に、自らの仕事への態度はル・コルビュジェとは正反対だと言いたかったのであろう。以後、アニングはロッズの下でアフリカにおけるMRUの業務に取り組んでいくことになる。ただし、ATBATは任意団体である以上、ル・コルビュジェ事務所を辞職したことが直ちにATBATのリストから削除される理由にはならないはずである。この点については疑問は残る。

なお、アニングに代わって番頭となったヴォジャンスキーもまた「若者」の筆頭であった。とりわけ、MRUや自治体、企業、それ

にマルセイユにいるボディアンスキーやキャンディリスら他の ATBAT メンバーに対し、ル・コルビュジェの代理人として多い時には月に数十通に及ぶ建材の発注、作業指示等の文書を作成した。1949 年に番頭から副建築家(architect adjoint)に昇格している。

5.2 事務所移転と指導者交代の経緯

ボディアンスキーは、当初はセーヴル通り 35 番地に詰めていたことが書簡からわかる^{註33)}。更に書簡を辿ると、49 年 8 月 31 日、ヴォジャンスキーからボディアンスキーに、サン＝オギュスタン通り 10 番地の事務所への移動を指示している(FLC:G3-14-4)。ボディアンスキーが上述の「ル・コルビュジェとの対等な関係の再構築」を会議で申し入れたとすれば、それは、ル・コルビュジェからの ATBAT の分離独立による「再構築」に落ち着いたのである。同年 12 月には、移動の際にボディアンスキーが持ち去った図面を、研究に不可欠なためすぐに送るように伝えている(FLC:G3-14-328)^{註34)}。両者の関係は最も重要な資料情報の伝達にさえ支障をきたしていた。

1950 年 1 月、ル・コルビュジェは「ATBAT と自分は 1949 年 8 月以来別れ、セーヴル通り 35 番地は私の個人事務所なので ATBAT の郵便物は送らないで欲しい」と役所に通知した(FLC:G3-16-579)。要するに、自分の事務所にかかっていた ATBAT の看板を他所に移したという意味である。多くの既往研究において、「ル・コルビュジェは ATBAT を離脱した」とされているが、実際はボディアンスキーがその看板を背負って出ていく形だったのである。では、どこに移ったかと言えば、それはもう一つの ATBAT の事務所、すなわちサン＝オギュスタン通り 10 番地のルフエヴル事務所に他ならない。

事実上の移転が 1949 年 8 月だったとすると、『マルセイユのユニテ・ダビタシオン』出版時点では既に ATBAT を離脱していたことになる。同書でそれが明記されなかったのは、単に間に合わなかったか、あるいはなんらかの調停がなされていたためかもしれない。

5.3 小括

ATBAT とル・コルビュジェの関係は、アニングの離脱と事務所の移転という人的再編成により一度リセットされた。ただし、50 年代以降も新生 ATBAT の仕事にル・コルビュジェ、ボディアンスキー、キャンディリス、そしてアニングらが協働していることを考えると、これは確執による分裂というよりは、話し合いによる ATBAT とル・コルビュジェの関係の再構築が本質だったと見るべきであろう^{註35)}。

6. 結論

以上本稿では、主要メンバーの参加から、アメリカ調査旅行、マルセイユのユニテ・ダビタシオン、事務所の移転に至る経緯を分析して、初期 ATBAT の結成と変容の歴史を明らかにした。

まず、組織としての ATBAT は、ル・コルビュジェの個人事務所ではなく、異なる立場、職能の人材が集まった、多様で有志連合的な存在であった。そして、事務所の移転はそうした ATBAT の特徴を喪失させたのではなく、むしろその特徴を明確にするためにこそ必要な、建築家と技術者の関係の再構築であった。これは建築家と技術者の分業化が進み、そこでル・コルビュジェが建築家として大成功を収めていくという歴史的過程において理解されよう。

また、後年の業績に繋がってゆくとみられる主要メンバーそれぞれの活動内容が明らかとなった。1.3 で示した国際交流の定義から、

人物を軸にその特徴をまとめておきたい。ボディアンスキーは、技術者としての知見と豊富な海外業務経験を兼ね備え、国連でのロビー活動とマルセイユの現場のまとめ役として活動した。ル・コルビュジェを顔として進展する建築の産業化の舵取り役として ATBAT を主導したといえる。建築家志望のキャンディリスは、ユニテ・ダビタシオンから個別集合住宅の発想と具体化の方法をじかに学び取ると同時に、現場管理を通じて地域住民との交流を引き受けた。アニングは、モデュロールに一定の貢献がありアメリカ調査にもメンバーに支えられながら参加した。生真面目さと仕事への考え方の相違からル・コルビュジェから離反したが、それをきっかけにアフリカにおける MRU の業務に着任することとなった。ATBAT は更に、クロウディウス＝プティやエコシャールといった、組織外の重要な協力者をこの時期に得ていた。

以後、能力と貢献のあったメンバーはそれぞれの道を模索していくが、その活動の器である国際交流組織 ATBAT は、モロッコを初めてとする世界各地で展開されることでより特徴的な成果をあげていくことになる。次稿（その 2）において考察を続けたい。

謝辞

本研究は、科研費若手 A 「多様性と共生の知恵を育む中東・北アフリカ地域の都市計画史」(24686067) に基づき実施されました。

注

- 注1) 自身も建築家としてアテネ憲章に忠実な作風で知られた。とりわけボディアンスキーの死の前年の 65 年にはその人物評伝を発表している。
- 注2) モニエはユニテ・ダビタシオンを主題としているが、ATBAT については補足的記述があるに過ぎない(文獻 29)。シャルジュは黎明期の ATBAT の概要を報告している(文獻 7, pp.34-37)。ル・コルビュジェ研究の泰斗コーアンも概略しているに過ぎない(文獻 9, pp.171-172)。
- 注3) habitat とは、住むという実践を通じた文化的に適応された居住のことを意味するとしている。'habitat' was a notion which means culturally adapted habitat (habitat adapté) based on dwelling practice in climatological, geographical, and geological characteristics in the area (文獻 1, pp.139-146)。
- 注4) 書簡の多くはル・コルビュジェ財団(Fondation Le Corbusier)所蔵資料であり、その目録に準拠し(FLC:Xy-x-y)の書式により本文中に資料番号を示す。また同財団所蔵資料は書簡だけではなく図面や報告書を含む。
- 注5) 筆者がアニングと親交のあった番匠谷のバイルートの自邸で発見したもので、1975 年までの経歴が書かれている。
- 注6) 履歴書、既往研究が言及。例えば文獻 18, p.390「アニング」の項。
- 注7) エリック・マンフォードは、モデュロールの発明者はル・コルビュジェ、アニング、ASCORAL の仏人グループとしている(文獻 30, p.308)。
- 注8) ほぼその通りの内容が書簡から確認できる。例えば、1944 年 1 月 31 日のル・コルビュジェからアニング宛書簡(B3-17-34)。
- 注9) コーアンはル・コルビュジェがコメントした書簡を紹介した。文獻 10。
- 注10) 「占領下の期間、わたしには、建築の仕事はまったくなかった。わたしの名は辱められていた」(文獻 22, p.10)。
- 注11) 例えば、文獻 22, p.102 に、建設分野の理論的研究のための 11 の部会に分かれ、成果を出版しているとする。
- 注12) この他、ベルナル・ゼルフス、マルセル・ルーなど、ル・コルビュジェに近い建築家と会っている。
- 注13) 例えば、FLC:F1-17-42 及び FLC:F1-17-44 に基づきエレン・グラント＝ロスがそのように指摘している(文獻 15)。
- 注14) アイユープ朝期のダマスカスの遺産を扱った共著がある(文獻 11)。
- 注15) FLC:DI-13-229。なお講演の日付は概ね本文には記されていないが、FLC の目録に記されている。
- 注16) CIAM の代弁者の一人だった歴史学者ゲーディオンも初版 1948 年の著書でエコシャールの業績と活動に触れている(文獻 14, pp. 636-639)。
- 注17) モネのリーダーシップに基づき、ドイツのルール・ザール地域を保護領としフランスの復興財源とするモネプランが計画庁の最大の業績である。
- 注18) MRU の官報によると CSTB の創設は 1947 年 8 月 26 日であった。
- 注19) 文獻 6, p.28。また、進来廉が仏留学経験を踏まえて解説(文獻 37)。
- 注20) モースは 45 年としている。文獻 36, p.343)。モニエは 46 年(文獻 29, p.164)、マンフォードは 47 年としている(文獻 30, p.158)。ATBAT という用語は記述の通り 45 年に

は使われていた。

注 21) ページ IX。

注 22) いずれ MRU の直属機関としたいと考えていた(文獻 12, p.178)。

注 23) 例えば、モニエは協力者にアニングをあげている。

注 24) 本稿では図面は掲載しないが、FLC でサン＝ディエ同様にアニングの署名付き図面が所蔵されていることを確認している。

注 25) 両計画が中止に終わったことについて、「なんてことだ！もしその順序が逆だったならば、マルセイユのユニテが最初に建設されれば、その後でサン＝ディエとラ・ロシエルが機械主義社会のもつ可能性の目覚ましい証明になったというのに」と憤慨している(文獻 22, p.102-103)。

注 26) キャンディリスは、ラ・ロシエル＝パリスにおける計画がまだ進行中であった頃のこのエピソードを紹介し、ル・コルビュジェの「自由さ」と「不器用さ」をあげている(文獻 5, p.155)。

注 27) 文獻 5, pp.148-149。また、キャンディリスの給料及び社会保障について説明されたル・コルビュジェからの手紙が存在する(FLC:G3-16-489)。

注 28) カサブランカについて文獻 24、パニョルについては文獻 19 を参照。

注 29) この他、次期大統領ルネ・コティとマルセイユ知事を随伴していた。

注 30) 例えば文獻 23, pp.80-82「ボディアンスキー」の項において、書簡を通してどのような確執があったかが記述されている。

注 31) 原典表記は “L’atelier ouvert depuis 28 années, 35, rue de Sèvres à Paris” (文獻 22)。

注 32) 仏語原文は以下の通り。C’est pourquoi, l’esthétisme, les recherches académiques ne sont pas dignes. Il n’y a qu’une solution, travailler pour une reconstruction valable. C’est ce que vous ne pourrez jamais faire, Et c’est pourquoi je vous quitte.なお、ユィッテンホーヴもロッズとの関連でこの件を指摘している(文獻 40, p.406)。

注 33) 例えば、1947 年 2 月のボディアンスキーからアメリカのホテルへ宛てた手紙では、差出人ボディアンスキーの所属は ATBAT、セーヴル通り 35 番地となっている(FLC:D1-19-277)。

注 34) 更に 49 年 10 月にはヴォジャンスキーより、MRU の決定として、ボディアンスキーに対し研究の推進を指示する内容の書簡を出している(FLC:G3-14-67)。この他、文獻 23 も参照。

注 35) 例えば、MRU がサン＝オギュスタン通りの ATBAT に出すべき書簡を誤ってセーヴル街の事務所に出し、開封してしまったヴォジャンスキーが「ATBAT の」ボディアンスキーに詫びて転送するという出来事が 51 年 3 月に起きている(FLC:O4-15-446)。

参考文献

- 1) Avermaete, Tom: *Another Modern. The post-war architecture and urbanism of Candilis-Josic-Woods*. Rotterdam: NAI Publishers, 2005.
- 2) Azuma, Hideki: *Kafu to Le Corbusier no Paris* (Paris for Kafu and Le Corbusier), Shinchosha, 1998 (in Japanese) 東秀紀: 荷風とル・コルビュジェのパリ, 新潮社, 1998.
- 3) Bodiansky, Vladimir. Collaboration architecte-ingénieur, *Techniques et Architecture*, 25, 4, pp.122–24, 1965.
- 4) Candilis, George: Vladimir Bodiansky, In *Contemporary Architects*, edited by Emanuel Muriel, 2nd ed., p.103, St. James press, 1980.
- 5) Candilis, George:*Bâtir la vie -Un Architecte témoin de son temps-*, inFOLIO, 2012.
- 6) Cerceau, Julien: Le logement d’après-guerre, École d’architecture de la ville & des territoires à Marne-la-Vallée, 2013.
- 7) Chaljub, Bénédicte: *Candilis, Josic & Woods*, Paris, Infolio, 2010.
- 8) Claudius-Petit, Eugène. Renaissance, *L’Architecture d’Aujourd’hui*, mai, pp.5–6, 1945.
- 9) Cohen, Jean-louis: *Scènes de la vie future : L’architecture Européenne et la tentation de l’Amérique, 1893-1960*, Flammarion, 1997.
- 10) Cohen, Jean-louis: Le Corbusier’s Modulor and the debate on proportion in France, *Architectural Histories*, 2, 1, pp.1–14, 2014.
- 11) Ecochard, Michel: *Le voyage du Général de Gaulle en Syrie et au Liban, été*, Beyrouth, La Syrie et l’Orient, 1942.
- 12) Fripier, Christel: Les ingénieurs-conseils dans l’architecture en France, 1945-1975 : Réseaux et internationalisation du savoir technique, Université Paris I - Panthéon-Sorbonne, 2009.
- 13) Fripier, Christel: The career of engineer Vladimir Bodiansky, *Proceedings of the Institution of Civil Engineers- Engineering History and Heritage*, 165, 2, pp.113–21, 2012.
- 14) Giedion, Siegfried, *Mechanization takes command a contribution to anonymous history*, New York, Oxford university press, 1955.
- 15) Grant-Ross, Helen: Gérald Charles Hugh Hanning, Architecte Urbaniste 1919-1980, Université Paris I - Panthéon-Sorbonne, 2002.
- 16) Gwendolyn, Wright: *The politics of design in French colonial urbanism*, Chicago, The university of Chicago press, 1991.
- 17) IAUURIF, La carrière internationale d’un grand urbaniste: Gerald Hanning (1919-1980), *Cahier de l’IAURIF*, pp.1–12, 1981.
- 18) Institut Français d’Architecture: *Architectures Françaises Outre-Mer*, Pierre Mardaga,

1992.

- 19) Kato, Kunio: *France no Toshikeikaku* (Urban Planning in France), Kajimashuppankai, 1965 (in Japanese) 加藤邦男:フランスの都市計画, 鹿島出版会, 1965.
- 20) Le Corbusier: *Quand les cathédrales étaient blanches -Voyage au pays des timides-*, Éditions Plon, Paris, 1937. (in Japanese) ル・コルビュジェ(生田勉,樋口清訳): 伽藍が白かったとき (岩波文庫), 岩波書店, 2007.
- 21) Le Corbusier: *L’Unité D’habitation de Marseille*, Mulhouse, 1950a. (in Japanese) ル・コルビュジェ(吉阪隆正訳): モデューロール, 美術出版社, 1952.
- 22) Le Corbusier: *Le Modulor*, Boulogne, Éditions de l’Architecture d’aujourd’hui, 1950b. (in Japanese) ル・コルビュジェ(山名善之/戸田横訳): マルセイユのユニテ・ダビタシオン, 筑摩書房, 2010.
- 23) Lucan, Jacques: *Le Corbusier, une encyclopédie*, Paris: Editions du Centre Pompidou, 1987. (in Japanese) ジャック・リュカン(加藤邦男訳):ル・コルビュジェ事典, 中央公論美術出版, 2007.
- 24) Matsubara, Kosuke: *Conservation et modernisation de la ville historique de Fes, Maroc*, ILCAA, 2013. (in Japanese)松原康介: モロッコの歴史都市 フェスの保全と近代化, 学芸出版社, 2008.
- 25) Matsubara, Kosuke:The genealogy of Haussmannization in the historic city of Aleppo : A case study about the oversea deployment of French urbanism, *Journal of the City Planning Institute of Japan*, No.44-3, pp.889–894, 2009. 10 (in Japanese) 松原康介: 歴史都市アレップにおけるオスマニザシオンの系譜-フランス都市計画の海外展開の一事例-, 都市計画論文集, No.44-3, pp.889–894, 2009. 10.
- 26) Matsubara, Kosuke:The early works of Gyoji Banshoya in Japan, *Journal of Architecture and Planning* (Transactions of AIJ), Vol. 77, No. 674, pp. 931-940, 2012.4 (in Japanese) 松原康介: 番匠谷亮二の青年期における国内業績, 日本建築学会計画系論文集, 第 77 巻, 674 号, pp.931–940, 2012. 4.
- 27) Matsubara, Kosuke: Gyoji Banshoya (1930–1998): A Japanese planner devoted to historic cities in the Middle East and North Africa, *Planning Perspectives* 5433 (April 2016), pp. 391–423, 2016.
- 28) Mitamura, Tetsuya:Urban design for Moroccan historic cities by the architect-urban planner Henri Prost, *Journal of the Japan Society of Design*, No. 62, pp. 108-109, 2013.6 (in Japanese) 三田村哲哉: 建築家・都市計画家アンリ・プロストによるモロッコ歴史的都市のアーバン・デザイン, デザイン理論, 62 号, pp.108–109, 2013. 6.
- 29) Monnier, Gérard: *Le Corbusier : Les unités d’habitation en France*, Paris, Belin-Herscher, 2002.
- 30) Mumford, Eric: *The CIAM discourse on urbanism, 1928-1960*, Massachusetts, The MIT Press, 2000.
- 31) Peyceré, David: *Architectes Français au Sud et à l’Est de la Méditerranée*, Paris, Institut Français d’Architecture, 2003.
- 32) Pourreau, Benoît: La politique d’aménagement du territoire d’Eugène Claudius-Petit, *Vingtième Siècle. Revue d’histoire*, 79, 3, p.43, 2003.
- 33) Pourreau, Benoît: *Un politique en architecture - Eugène Claudius-Petit (1907-1989)*, Paris, Le Moniteur, 2004.
- 34) Sasaki, Hiroshi: *Kyosho eno Dokei Le Corbusier ni miserareta nihon no kenchikuka tachi* (Admiratio for the great master. Japanese architects admired by Le Corbusier), Sagamishobo, 2000 (in Japanese) 佐々木宏: 巨匠への憧憬 ル・コルビュジェに魅せられた日本の建築家たち, 相模書房, 2000.
- 35) Sauvaget, Jean. and Michel Ecochard: *Es Monuments Ayyoubides de Damas. Livraison II. La Madrasa Raihâniya. La Madrasa 'Adrâwiya. La Madrasa 'Izzîya Hors-Les-Murs. La Madrasa 'Adiliya. Trois Bains Ayyoubides de Damas*, Paris, Boccard, 1940.
- 36) Stanislaus, von Moos: *Le Corbusier Elemente einer Synthese*, Frauenfeld: Verlag Huber & Co.AG, 1968. (in Japanese) スタニスラウス・フォン・モース(住野天平訳): ル・コルビュジェの生涯 建築とその神話, 彰国社, 1981.
- 37) Suzuki, Ren: Detail (Saibo) wa zentai no ichibu dearukoto, konna atarimaeno koto wa nai, *Detail*, Autumn, pp.31-34, 1964. (in Japanese) 進来廉: ディテール(細胞)は全体の一部であること こんな当たり前のことはない, ディテール, 秋号, pp.31–34, 1964.
- 38) Tournon-Branly, Marion: History of ATBAT and its influence on French Architecture, *Architectural Design*, 35, pp.20–24, 1965a.
- 39) Tournon-Branly, Marion: The work of Vladimir Bodiansky, *Architectural Design* 35, pp.25–28, 1965b.
- 40) Uyttenhove, Pieter: *Marcel Lods : Action, Architecture, Histoire*, Lagrasse, Editions Verdier, 2009.
- 41) Uyttenhove, Pieter: *Beaudouin et Lods*, Paris, Edition du patrimoine, 2012.
- 42) Wogenscky, André: *Les mains de Le Corbusier*. Paris, Edition de Grenelle, 1987. (in Japanese) アンドレ・ヴォジャンスキー(白井秀和訳): ル・コルビュジェの手』, 中央公論美術出版, 2006.
- 43) Yatsuka, Hajime: *Le Corbusier -Seiseiji toshite no urbanisme-* (Urbanisme as an outbreking politics), Aotosha, 2014 (in Japanese) 八東はじめ, ル・コルビュジェ 生政治としてのユルバニスム, 青土社, 2014.

FORMATION AND CHANGE OF AN INTERNATIONAL EXCHANGE ORGANIZATION ATBAT

A study on the history of international and regional exchange activity of ATBAT (Atelier des Bâisseurs), Part 1

Kosuke MATSUBARA *

* Assoc. Prof., Faculty of Engineering, Information and Systems
Division of Policy and Planning Sciences, University of Tsukuba, Ph.D.

The ATBAT (Atelier des Bâisseurs), probably best known as the architectural design office of Le Corbusier that realized the *Unité d'habitation* of Marseille, was not solely Le Corbusier's main place of activity; many architects and engineers from various origins attempted to produce their own planning theory through activities all over the world.

Assuming the ATBAT is an international exchange organization, this research will clarify how its key members joined it, what they learned about the related area through cooperation both within and outside of the ATBAT, and how they finally became independent from Le Corbusier. Unknown previous experiences of the key members, who later became important architects and urban planners, are historically clarified. The result of this historical research will be meaningful for future studies examining the ATBAT's planning theory from the cultural and regional viewpoints.

The overall picture of the ATBAT, which has been an object of much praise, criticism, and reassignment from members, is complicated. In this research, four key members who represent the international exchange at the ATBAT are chosen and the background of their participation and collaboration with the ATBAT is clarified. The key members are Vladimir Bodiansky, George Candilis, Gérard Hanning, and Gyoji Bانشoya. The contents of their exchanges, including points of opposition among them, will be examined by analyzing primary materials, such as their letters, business records, autobiographies, planning documents, and magazine articles, to clarify the history of the ATBAT's organizational transformation. In contrast, in this research, I will not examine the content of their plans; my consideration is limited to the simple facts of the members' footprints by studying the remaining documents and records. This research aims to clarify the history of the ATBAT organization as this aspect has not been systematically treated in previous studies in which planning-theory research was the main focus.

Based on the participation process of the key members and the work experience in the *Unité d'habitation* of Marseille, the history of the formation and transformation of the initial ATBAT was clarified. In the formation process, the key members worked for the creation of the CSTB, associated with the Syrian-Lebanese expert Michel Ecohard who could deal with historical urban spaces and modernism very well, and worked with the United Nations and the MRU. All their works can be regarded as international exchange activities in the ATBAT that were created for promoting the reconstruction of war-damaged France.

The organizational change of the ATBAT can be understood in the era of industrialization wherein architects and engineers were divided according to their specializations. Furthermore, Le Corbusier was a highly successful architect of the *Unité d'habitation*. In other words, the friendly relation between Le Corbusier and the ATBAT members at the beginning of the formation rapidly changed, and the engineers were adopted by the architects to work at a disadvantage. Therefore, the talented ATBAT members who had contributed to the project in Marseille had to explore their own path. Hanning willingly left Le Corbusier. Candilis was ambitious enough to be an architect himself. Bodiansky began pursuing an independent career as a consultant engineer. Since then, the ATBAT underwent a further major change, but its trigger was brought about by the work experience of the *Unité d'habitation* of Marseille, which is still a symbol of the era.

(2017 年 4 月 7 日原稿受理, 2017 年 9 月 15 日採用決定)